

論 述

注 意

1. 問題は全部で6ページである。
2. 解答用紙と下書き用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に縦書きで記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙および下書き用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

次の文章を読み、以下の問に答えなさい。

問一 空欄〔1〕、〔5〕に該当する語句を、本文中から抜き出しなさい(各四字以内)。解答用紙(その一)を使用

問二 傍線部(A)「地図は人類の偉大な発見であるが、人類の思考の枠にもなる」という指摘を踏まえたうえで、「国民国家のイデオロギ―」に関する筆者の見解を要約しなさい(八〇字以内)。解答用紙(その一)を使用

問三 傍線部(B)の問いに対するあなた自身の考えを述べなさい(八〇〇字以内)。解答用紙(その二)を使用

子どもの頃、世界地図を見るのが好きだった。地図は国ごとに美しい色で塗り分けられ、日本は赤く世界の中心にあった。大英帝国は巨大な面積を占め、インドもオーストラリアもカナダもピンク色だった。メルカトル図法のおかげでソ連やカナダの北方は無限にひろがり、世界の果ての神秘を思わせた。広大な中国は黄土そのものであった。とりわけ私の夢を誘ったのは、ユーラシア大陸の西端にあるフランスの青紫とポルトガルの赤紫色であった。二〇年後にフランスに留学し、休暇を利用してスペインを横断し、ポルトガルに至り、リスボンの港に立ったとき、とうとうやって来たな、という感慨があった。

世界地図が壁に貼ってあったのは、戦争があったからだろう。小学校に入るとまもなく「大東亜戦争」がはじまり、中国や東南アジアの各地に次々と日の丸が印された。私の父は軍人であったから、家族は父の部隊の移動のあとを追って朝鮮、満州の各地を転々とした。そして敗戦。戦後、私は長いあいだ世界地図を眺めて夢想する習慣を失っていた。世界地図が気になり出したのは、一九六〇年代の後半、私自身も外国に出かける機会が多くなってからである。

経済成長とともに、そして〔1〕の呼び声とともに、いまや再び世界地図が巷にあふれる時代となった。相変わらず小さい列島を中心に。色どりは変わったが、相変わらず国々を色分けにして。北が上なのも同じことだ。あるとき数人の地理学者にその理由をたずねてみたが、納得のゆく説明は得られなかった。書物で調べてみると、聖地エルサレムを中心に置く中世のT〇図では東が上、イスラムの世界図では南が上であったらしい。世界地図は世界観の雄弁な表明だ。地図は人類の偉大な発見であるが、人

類の思考の枠にもなる。^(A)歴史学者によれば、先に触れたメルカトル図法は特定の歴史観と密接な関係にあるという。

この図法は、地表の各部分における方向・角度が正確に示されるので航海用の地図には適当であるが、距離や面積については、赤道付近は比較的正確に示されても、高緯度の地方では拡大され、形や大きさをあらわすのにきわめて不適当な図法である。だから、この図法によると、北緯四〇度以北が大部分を占める「ヨーロッパ」の面積が不当に拡大されて示され、ヨーロッパと面積において大差のない低緯度の「インド」(パキスタンを含む)がイベリア半島程度の大きさで示されることになる。ヨーロッパが大陸で、インドはアジア大陸の一つの半島のような錯覚を与えることになる。しかもこの図法による世界地図が、今日にいたるまで、多くの歴史書に用いられてきた。この図法は、ヨーロッパ「大陸」観を定着させ、ヨーロッパ中心的世界像を地理的に基礎づけてきたといえる。(前川貞次郎『歴史を考える』)

外国にいる友人に頼んだり、自分でも旅に出る度に各国で出ている世界地図を買う。太平洋を中央にもつてくるもの、大西洋を中心に置くもの、さまざまだが、それだけでも世界のイメージは何と違ってくることだろう。当然どこの国でも自国を中心に世界地図を作ろうとする。先日オーストラリア土産にもらった世界地図は南が上になっており、見ているとめまいがする。世界の崩壊だ。機知と批判精神にみちたオーストラリアの人も、自国を中心に置く習慣からは逃れられなかったらしい。現在のところ例外はタイ土産にもらった地図で、これはヨーロッパとアフリカ大陸が中央にあり、したがってタイは地図の右寄りになる。モロッコでは、おそらくどこかで売っているのだろうが、ついに世界地図を手に入れることができなかつた。世界地図に興味のない国、世界地図を必要としない国だつてあるだろう。

地理上の発見をめぐる競争に参加できなかった日本人は、だが鎖国のあいだにも世界地図に対する強い関心をいだいていたようである。一七〇八年、切支丹禁令を冒して日本に潜入した宣教師ヨハン・シドツチの尋問を行った新井白石の主要な関心の一つは「世界地図」だつた(『西洋紀聞』)。鎖国時代、平賀源内は皿に世界地図を描いて楽しんでた。

それは珍しい皿で、よく見ると皿の表に世界地図がかいてある。じつにきらびやかな色彩で、東半球皿と西半球皿になっている。「…」この皿のことはたいへんな評判になった。遠国からわざわざ見にくる学者も毎日二、三人はあった。江戸時代もこのころまでは、そう完全な世界地図はできていなかった。「…」

「さすがは新時代の先覚者だ」と、当時の学者たちは舌をまいておどろいた。昔からの卵形図法というありきたりな形式を破つて、球形図法による世界地図に思いつき、しかも皿の円とふちをこれに利用して、新世界図を表現し、旧知識から新知識へと一般大衆をみちびいていこうと企てたことは源内以外にはだれにも考えおよばなかつたろう。皿のふちにははつきりと目盛りが刻まれていることからいま考えても、ただ無意味に円形の皿をつかつたものではないことがわかる。(平野威馬雄『平賀源内の生涯』)

幕末から開国にかけて若い知識人たちは、たとえば福沢諭吉のように、外国製の世界地図を前に置いて、思考し、あるいは行動した。明治天皇の即位の儀式に地球儀が登場するのは、たとえそれが世界を足跡にする意図を秘めていたにせよ、興味深い。久米邦武は明治五年、岩倉使節団の一行がパリの国立図書館の「地球図」の部屋を訪れる情景を忘れずに書きとめている(『米欧回覧実記』)。だが日本人の最初の世界一周が、明治政府の要人の半ばを含む、東洋に誕生したばかりの近代国家をあげての事業であったことは、日本人の未来にとってはたして幸運だったのだろうか。使節団の精力的な行動と観察力は感嘆に値する。だが彼らが見たものは、世界の人々の生活ではなく、世界の「国家」と「国民」であった。

世界地図に興味をもちだしてから各国のテレビニュースが気になる。テレビは、空港、大学、病院、軍隊、銀行、証券取引所、百貨店等々とならんで、世界中どこでも似ているものの一つだろう。ニューヨーク、ロンドン、パリ、モスクワ、北京、東京など、ニュース番組のパターンはいずれもよく似ており、背景に自国中心の世界地図がある。国家の利害がしのぎを削る政治の世界では、世界地図の中で考える必要があるだろう。だが、世界地図の外に出ることはできないだろうか。宇宙飛行士は国境も(2)もない地球を見た。類似の経験は普通の飛行機旅行でもできる。もつとも世界地図の虚構と現実を知るには、歩いて国

境を越えるほうがよいかもしれない。

世界地図は、地球は諸国家によつて構成され、国境によつて区切られ、色分けされた国民が存在するという固定観念をわれわれに与えている。そして国家と民族と文化が一致するという偏見。ナシヨナル・アイデンティティの神話。それを失うことの恐怖。それに背く人々、すなわち「非国民」への反感。百数十カ国からの参加があるオリンピックでは、小国も大国も国家の名譽をかけて競い、それぞれに国歌をうたい国旗をうち振る。その熱狂ぶりは壯観ではあるが、少し距離を置いて眺めれば実に異様な光景ではないだろうか。

世界地図はしばしば塗りかえられる。大国による侵略、併合、分断、植民地化、あるいは長い闘争を経て得た独立。世界を二色や三色に塗り分けるイデオロギー的な地図、あるいは宗教や文化圏で分ける地図もある。だが、基本的な単位は国家だ。

地球が国家に色分けされてしまったのは、そんなに昔のことではない。せいぜい最近の二〇〇年、フランス大革命以後のことと考えてよいだろう。それなのにわれわれは近代国民国家のイデオロギーにすっかり侵されている。国家のイデオロギーの特色の一つは、自国と他国、同胞と外国人、「われわれ」と「彼ら」の二分法だ。昔、「彼ら」は怪物や食人種であつたりした。近年では黒人や共産主義者、犯罪者、外国人労働者、等々だ。公認された差別の原理である。オリエンタリズムとは結局、東洋に対する支配の様式である、と主張して議論を呼んだエドワード・W・サイードの著書『オリエンタリズム』には、異種文化の真の理解は不可能ではないかというペシミズムが顔をのぞかせている。「われわれ」と「彼ら」の二分法に立つかぎりは、とつけ加えるべきだろう。

だが、いま現実の世界では国境は侵犯され、国家は変形を余儀なくされている。人工衛星に備えつけた性能のよい特殊なカメラがあれば (3) しつつある無数の影をスクリーンに映し出すだろう。それらは人間の群れであり、巨大な資本であり、世界の工場の廃棄物であり、いまだ不分明な思想である。

国民国家の原理にもとづく地球上の古い秩序は、いま音をたてて崩壊しつつある。核兵器はもとより、酸性雨や放射能に汚染された雨も容易に国境を越える。アメリカの工場の廃棄物がカナダの河川に流出して水俣病を発生させる。チェルノブイリの放射能は西ヨーロッパの牧草地におよび、汚染された牛乳を食卓にもたらず。資本も情報も容易に国境を越える。日本の資本が南アジア

の熱帯雨林を裸にし、アフリカの象を絶滅に追いやる。ベルリンの壁を崩壊させ、社会主義の衣装をまとった現代の専制政治を打破するのに、映像の力が働いていたことは確かである。そして戦争や災害や圧政や貧困から生まれた大量の難民と移民の群れが国境を越えている。外国人労働者と呼ばれる貧しい越境者の群れを、われわれはどのように迎えたらいのであろうか。ローマ時代であれば蛮族の侵入とでも呼んだであろう。だがその蛮族が次の時代を作ったのだ。

そうした世界の状況をわれわれは事実として、あるいは知識として、よく知っている。だが、何かある具体的な事柄に直面したときのわれわれの反応は、驚くほど愛国的であり、自国中心である。国民国家の体制が足元から崩れているのに、あるいはそれ故にいっそうわれわれは国民国家のイデオロギー——ここではよりビジュアルに (4) のイデオロギーと呼んでおきたい——に執着し、深くとらわれている。その一例は、移民や外国人労働者に対するわれわれ日本人の反応だろう。「われわれ」の中の「彼

ら」はいつこのようにして「われわれ」になるのだろうか。あるいはその逆は、「われわれ」と「彼ら」の二分法はどのようにして廃棄し、あるいは乗り越えられるのであろうか。これは現代の最大の思想的な課題だと思ふ。国際化や異文化交流の問題はそこから出発すべきであろう。外国人労働者の存在は国籍の概念を変え、国家の概念を突き崩す。外国人労働者の多いフランスでは近年国籍の再定義が問題となり、政府が大部の報告書を作成した。わが国でも数年前に国籍法が改正されたが、外国人の受け入れという点ではむしろ (5) に近い。国際化とは英語を喋ることではなく、「賢人会議」や「文化サミット」——何という無神経で非文化的な言葉だろう——の高邁なお説を拝聴することではなく、身近に外国人をいかに受け入れ、いかに接するかにかかっていると思ふ。

一個人に特定の国籍を強制することのできる根拠はどこにあるのだろうか。そもそも国籍とは絶対的な論拠のある概念だろうか。現行憲法の第二二条には、「何人も、外国に移住し、または国籍を離脱する自由を侵されない」という条文がある。第一条や第九条にくらべてこの第二二条はほとんど知られていないが、同じように重要な意味を含んだ条文だ。この条文は国家と国籍のあり方に大きな問題を提起してはいないだろうか。仮に自国民に外国への移住の自由を保障するなら、他国民の自国への移住の自由も認めるのが道理というものではないだろうか。この条文を読んだとき、私はジャン・グルニエの「人は生地を選べないが、死ぬ土

地は自分で選ぶべきだ」という主張（『地中海の瞑想』）を思い出した。あるとき私は地中海のほとりで死ぬことを夢想したが、結局は今住んでいる京都を選ぶかもしれない。いずれにしても、私がアルジェリア人ではなく日本人でなければならぬ究極の理由は見出せないだろう。そして人々が、それぞれに死ぬべき土地——したがって自分にふさわしく生きるべき土地——を求めて地球上を移動しはじめたら、あのいまわしい「非国民」という言葉もなくなるだろう。

（西川長夫『国境の越え方』による。原文の字句・表現のほか、記述の順序を一部改め、補足的な文言を追加した）

